緑字生活

——デリュージョン・ストリート——

九段の坂を登っていた。テルミヌスが匂っているあたりにさしかかり、これからこの坂を登りきり、詩集を出している会社へ赴こうとしていた。その先には鍛屋がある。用事を終えた後は、いつもと同じように迂廻し、古の職人たちに混じって粛々と酒を呑みながら鰹を噛うことになるのだが、そのことを考えながら右手にある大鳥居を見ていた。

「首身離るとも心惑りず」（首身離るとも心惑りず）という詩句がある。数年前、千鳥ケ淵の咲き誇る桜の樹の下で、一緒にいた詩人が、英霊ありとせばあの大鳥居の向うの杜から出できて満開の花の中を通過している頃なり、と呟いた。この春には風に吹かれる花びらの中で、盛り切りの酒を長い時間かけて呑みながら、ひとり夕陽の色に染められる濠の水を眺めていた。

初夏の日差しを浴びた鳥居の上に、あの人が腰かけていた。足をとどめて濠の方に視線を落とし緑の深い濁った水の色を見やっていると、蛾包みのような、恐らくビニールか何かで厳いロープで括ってあるのだろう、石垣の傍に浮かんで動かないものがあった。初めのうち、わけもなくそれは死体であると納得していた。「身既死兮神以霊／子魂魄兮為鬼雄」（身既に死すれども神以て霊に／子の魂魄鬼雄と為る）、あの人の顔が空に大きく広がって、別格官幣社の境内を呑み込むように覆んで見えた。

書類を小脇に抱えながらパイプに火を点けると、向うから女子学生が数人、声高に喋りながら近づいてきた。性的な会話のはずであったが、滑稽な車のエンジン音やクラクションの音に混じって何やら雑種の鳥のさざめきに似ていた。

堀のある街は美しいのだが、新品のビルディングのある景色はいかにも粗末な気がした。それでも通りを左に折れると、ところどころ古い家並を残しただたらの坂が麹町へと通じている。とある一軒の家の門前に、塀が崩れて怪傑人が出ても関知しない旨の立札があった。

Janis Joplin のSummertime が印象深いのだが、小さな風のように胸の中に流れたのはKeep warm だった。死体の梱包が浮かんでいると思ったのは、そのあたりがいかにもそのような場所に相応しいと考えていたからであり、このあたりをそぞろ歩くと、京都の円山公園の巨大な夜桜とはまた異なった満開の桜の不気味さを思い起こすのだった。

すでに逝った詩人は存在は哀愁であると考えていたし、スペインに住んでいたある作家は男の悲哀についての小説を発表していた。いまはもうたれも見えないけれど、夏が去り、秋が訪い、年等の季節が経過れば、その始まりの中で風は冷たく、寒そうに唇を噛む人々の足の動きだけが、忙しげにいつまでもつづくのを見るのだろう。

緑字生ズ

題字　加藤郁乎

詩篇

水に恋　2　芝山幹郎
カーニヴァル　6　金石　稔
今ひとつの煅焼　10　小岡明裕
黎明　12
幽鳥感覚　14　富永隆一
蝸牛の塔　16　岩井　薫
空中の書　25　紙田　彰
緑字生ズ　37

デリュージョン・ストリート　紙田　彰　*cover essay*
月の魚　20　立木鷹志
ALBERTINA, WIEN　神谷俊美　9
（写真集「窗樣譜」より
緑字生ズ　識語　48

美術協力　直江屋主人
富永隆一

水に恋

芝山幹郎

路地を呑む
湾を呑む
火山を呑んで島を呑み
とうに噛みこんだ毒を生唾で殖やし
井戸の底に棲む魚を一息で釣り上げる
掏摸の空
詐欺師の空
泥棒の空
交わる空を洗濯物はまたぎ
窓からは植木鉢と怒声が降ってくる

帰るなら早く帰れ
鮨屋の長っ尻じゃあるまいし
油断の油断で民謡をがなり
語尾と眼尻をぼやけさせ
変化球ひとつの悪だくみすら持ち出せず
縦の速度って何ですか　だと
薄いぜ兄ちゃん
そいつは肉の下算というものだ
舌が腫れるまで膝小僧を責めてみな

路地を呑む
湾を呑む
テヴェーレの
アルノの
サントキアラの
シンゲルの
テムズの
パシグの
ミシシッピの
ハーレムの
ふっ　どれも泥水をなめてきた靴先が
この午後は
漂えど沈まずの板子を蹴って
路地を呑む
湾を呑む

下れば蜥蜴
街灯のない夜の坂を揚巻に仕立て
ガラス屑と甲虫の屍骸を撒いた石畳に
なけなしのリフを一発響かせる
「君と僕との間に紙は要せず

すべての保険は悪夢を要す」
なんて電波だ
ふくれっ面の退場かい
エスプレッソが跳で逃げ出す空元気の密売だ
よせよ　潜中の龍
四百四病の引受どころはそこじゃない
逃げても隠れても
口をつぐむ手はないのだから
霧や寒さをいいわけにするなよ
数少ない長所とやらに眼をうるますなよ
笑顔のおまけにうっかり底を割るなよ
むしろ漉せ
伏魔の肉とねんごろに情を通じ
漉せるものなら
そこで漉せ

カーニヴァル

金石　稔

ニルヴァーナ、左肩口からはいって来る一月　水びたしの指、裸の光をはずして傾けた森　狩り取られた雪崩の話。ぼ、ぼくは布にくるまって潮をくぐり　右手の震えの中で　長い夜の廃墟が、と聴いたところから　遠く離れてみてわかるのだ、ねばっこい海と名付けたノートの下から息を殺し　百年と九日かけて戻って来たあたりから頭痛が始まり、同じ頃、朝日が体をすり抜けていったのを数回認めたのだった。

＊

（切れ切れの古文書の中の犯罪のような）風

＊

ぼくのほほに埋めこまれて朽ちたきみらの熱意のしるし　ぼ、ぼくは願う
腕のつけねに傷ついた　あいうえおのひとつさえも草の種とならずに
息の底まで落ちつづけて
形どられ　はじけ匂う声になるのを。

＊

ぬれさぶりる
おおさびぶらりさ
みずごみずなみうな
ぬれひとりとひとびに

そばにことみるちに
とばりおれもむめられ
すばみとととともり
かりひかりさぶいと
ひとこえこえにだす

*

近づくもの
二つの衣装をまとった湖、羽毛のリボンで束ねられた　交差点上の卵と鍵

一頁から失われている（これら）
カーニヴァルの水かさや夜のおくれ毛
こわばってくるのだな
まだ動かない心ひとつでは。

*

にののめ　とて
ひらり　らむ　むかめては
としひととし　と
かのちを　さ　さく
ひとめ　のみ

*

銀の瞳で　やつはおれをみつめていた　青空を大きなものから小さなものへと　積みあげてはくずしながら

何度目かの水蜜桃が拾い集められた場所へとはるかな旅の半ば

めもとにつらい影をおとしたものが　涙している瀬戸ぎわでの団らん

めくってみるよ息、一息で
数年もたてば　これがはじまりと知れる。

*

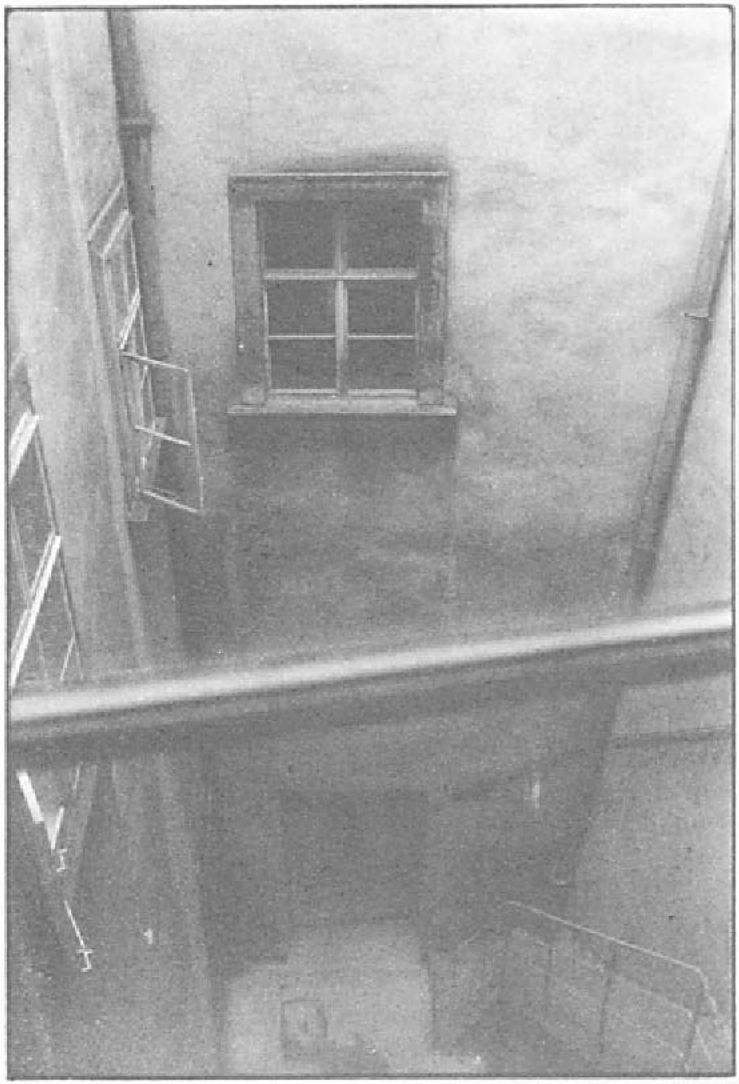
くださいぐぐくださいぐぐうと　きこえたところから遠く離れて想い出されるのだが、と書くなり眠り込める。（はずだ）

密林の夢のシャベットの夜の馬という名の歌手は疲れて都会の一隅で発声することはないだろう。
悲鳴が残る枕元に
走りつづけるのが夢だったのか
そのさなかに　光の通路のただなかに　わたしがいたカーニヴァル。
横顔でわかるのだ。

*

ニルヴァーナ、左肩口からはいって来る一月だったかしら　熱い雨、そぼ降る音の機密性は失われて　水びたしの指だってハナから闇なの。

痛いわここ、こころが砂ぼこり　と水ごりの数日前に戻る　眼覚めに息をとめる、と書き出すと。



ALBERTINA WIEN

今ひとつの煆焼

小岡明裕

En effet, la première venue ressemble
à la spirale précédente ;
Mallarmé

たしかに、そのとき、階段のうえから覗きみると、そこは水びたしであった。
手摺のない螺旋階段、白い肘掛椅子、むきだしの高い壁、それらが雑然と仄暗い水の影に潰っている。
目を閉じてそこを部屋とよぶには、かなりいびつで、そのうえいたずらに細長い楕円形のような匿名の空間。海はその外側にある。
そこと海とが溶けあっている浅瀬、そのあわいは沙漠とよばれ、豊かな起伏に乾いた砂の傾斜は部屋と海とをつなぎ、徐々に海のほうに向かってせりあがっている。
それゆえ、階段のうえから覗いたそこ、すなわち部屋は、額縁におさまった銅版画のように偶然を内包している、としかいいようがない。
次々と、幾羽もの黒い水鳥が水面をかすめて逃れ去っていった。
さむざむとした陽はとうに落ちている。
しかももはや何ひとつ、巻き貝も囁きも、またやさしく入り組んだ夢の舞台も、何もない。
あるいはこうだ。——叫びと夢の二点遠近法のなかで雲母の海がそのまま遠くあちらのほうへはがれてゆくとき、そこいらは一面苦い水泥のひりつく荒磯のひろがりがむきだしになる。抗いながらも足はずるずると緑と茶色の膠質にとられ、そんなとき空はきまって底ぬけに明るい。
たしかにそこは水びたしであった。目を閉じれば小さな波がきれぎれに盛りあがり、風にくるまれては舞いあがって次々と沙漠のほうへ運び去られた。

スパイロス！　ここをよぎるもの、そこに戻り、ここに至るもの！

――吹く風とともに階段ははげしく揺れた。

正直いって、わたしはその時に遅れがちだった。

覚束なげな振子時計のように、元の場所に戻る仕草、つまり階段に立つことに少しずつ遅れ気味であった。といって、海に背を向けむやみに森に踏み迷っているのではない。ここを通りぬければ再びそこにでられるというわけではなかった。

一羽の飛翔する鳥のかたちをきめこんでその時をうかがってはいたものの、帰路はつねに修正の外にあって、脇の通路、たとえば尖塔に突きあたる飛行の痕跡に羽を突きだすこともなく、ひまどっているのである。

その間も、いっさんにかすめ過ぎてゆく水鳥の黒い羽がくれないに燃えあがり、水びたしのシメールと迷妄の白い日々とは振り子にも似てめまぐるしく入れかわる。

そのためかどうか、そのひろがりの縁（ふち）の縁（ふち）さえ、わたしを飲みこむことができないのだ。

はたして階段のうえからみれば極端に歪んだ楕円形のひろがり。その外には海がある。

ここからみると水面全体が壁であり、階段である。

そのひろがりはおそらくいつものようにいまだにそのなかでひとつのひろがりとよびうるほどのものになっていないらしい――少なくとも外からではなく内側からあふれたものにちがいない。

たしかにそこは、水びたしであった。

大昔にわたしはそこに船火事をみた記憶がある。波のうえに這いひろがる低い炎に際立って、半ば水に没した火の柱が偶然のように美しかった。

気がつけばすべての物が最初の秩序に復していた。視界はひりつく泥の岩場で塗り潰されている。思

えばあの火の柱は外海を照らすことはなかったのか。
海をさして今も鳥は飛び去ってゆく。
わたしは遅れがちのままだ。強いられたこの果てしない旅に。船火事をさながらに、金波銀波の容赦ない散乱のあとか、あるいはそれに先立ってのことか、いわば、触れえないもえあがりの予感が眼底に貼りついたまま、階段のうえから覗きみると、たしかに部屋は水びたしである。
さしあたって、満ち潮のいつくしみと引き潮の不安のなかで、傾斜は偶然を孕んで徐々に海のほうへ。

le 8 mai, 1982.

黎　明

洪水の過ぎ去った朝まだき、舟は鉛の卵を載せたまま、満潮の果樹園から碇をあげる。
下草の陰のかぐろいほてりの波が入江のなかを浸してゆく忘却の塩の時間。背後では、土の板に根をおろした気忘い風の只中に記憶の碇を投げ入れる物音が夢の帆布を引き裂いているが、庭師が雛破を度忘れするように、掌のなかのマストが波頭に刻まれたシレーヌの緑の歌を憶い出せば、銹びついた悲鳴は野火となって燃えあがり、空の高みへ消えてゆく。振り返る版図の果てには何もない。

（舟はいつものように、欠伸する大鎌の曲線に沿って航海する）

ただ、いつもとちがうのは、刈り取られた秋の裸の風景。魚という魚が乾涸びて、夜の果ての白い腹をみせ、そこここに思いがけない幻を撒き散らしている。
それでも航跡が刃紋のうえに蹴立ててゆく白波は、果樹園の無数の畝の盛りあがりのうえに忘悄な真白のしぶきとなって散っているが、散りしぶく白さは、纜を張りつめた夢魔の時の浪費にほかならない。

終末の日に熟れるはずの葡萄の蔓が絡めつけている羅針盤の端から、蜘蛛の巣をすかした鱗雲の紙魚だらけの海図のうえにまで、壮大に架かった虹の橋。銀色の船体が危い約束の七色の曲率を辿ってゆけば、ゆき会うのは億年の孤独のなかで双のまぶたを切除した水夫ばかり。

――ころおい、暗い船底では、鉛の卵が世界のように覆る。

むろん日を経てこの海をわたるものが、忘却の淵にせりあがってくる水夫らの夥しい死骸の旅の歳月を見ないはずはない。漂う体が今けもののように熱いのは、重い疲労の船底で卵が孵化しはじめたからにちがいなく、このまま塩たれた朝風が香い沙漠に寝乱れた風紋の襞のなかで行き暮れるころには、世の終わりのための謎めいた鉛の文字がいくつか、洪水の底に燠のように燃えた土とともにこねあげられるであろう。

暗い大地。眠る海国。

波間に漂う舟の下半身は、徐々に蛇の尾の色に照り映え、そのまま砂時計の壺の底にとぐろを巻いて忌わしい水腫のように鎌首をもたげ、肉の迷路に聞き耳を立てる。

古い記憶をたぐりながら轆轤を回し、もうひとつ砂時計の壺を内側からこねあげ、ふいごの窯に火を入れて風下に呪文をはなつと、冒険の接木が逆立ち、地平にわだかまる積乱雲のくぼみには、あわただしく反転する魚が光る。しかも、それもこれも日の出を待っての柩のなかのいっときの苦役にすぎぬ。

鉛が融け尽きたためか、下半身がすっかり蛇になりきったためか、舟は吃水が徐々に浅くなり、気がつくともう井戸の傍に舳先を突っ込んでいた。

海は全体が苦むした果樹の根元の芝土にしみこんで波打っている。

舳先に垂れ下がった鉛の文字は解きほぐされることもないまま、このときようやく、吐き気にも似た海鳴りが果樹園の深い井戸の底から聞こえはじめる。

幽鳥感覚

富永隆一

何時からこうして当てもなくさまよい歩いているのだろうか。白濁した意識は定かな記憶を甦らせてはくれない。醜くふやけた手に握っている金属製の鳥が、けたたましい音をたてて、その鋭い嘴を開閉させた。

この鳥はいったい何処で掴まえてきたのだろうか。鳥は何も語ろうとはしない。その慄然とした姿が、喪失した記憶を物語っているように見える。

歩き疲れて石の上に腰をおろすと、それまで明るかった空が急に黒ずみ始めた。そして、あたり一面が暗くなり、そこに大きな影をつくった。

周囲の家々からは物音ひとつ聴こえてこない。ひっそりとして、奇妙な静寂さばかりが耳にいたく響く。鳥はもう逃避する事を諦めたようだ。それまで強く握っていた指を一本ずつゆるめていくと、鳥は不安そうに身を縮めた。いささかも逃げる気配を示さない。掌の上で淋しそうに眼を閉じて、青い泪を一滴、尾を引きながら落した。

悲哀の鳥を打ちのめしてはならない。この日暮れ、心もとない幽明のさなかにあって、冷厳な金属製の鳥は救いであるべきなのだ。

掌に染みた鳥の泪が、たったひとしずくの泪が、みるみるうちに肉体を腐蝕していった。それは懐古と愉悦の混じった、不思議な感覚を肉体に刻んだ。

やがて甘美な麻痺感が襲ってきた。慄えながら、愛しい物の怪に取りつかれると、勢いよく肉体を反転させて軋んだ。

鳥は頭上で鈍い金属音をたてながら舞い、冷静な表情で、痛苦に甘んじている肢体のまぶしい痙攣を観察している。その冷ややかな、光沢の乏しい眼球を、機を狙って捉えると、指先で鋭く抉った。

二つの強靭な球は掌の中で膨脹し、激しく回転すると、滑らかな肌を摩擦した。そしてまず手首ま

で呑みこむと、徐々に食欲を増して、からだ全体を球の中に納めてしまった。貪婪な眼球の、逞しいまでの意欲に打ちひしがれて、脆い肉体は細部にわたるまで浸蝕された。

眼球を失った鳥は、それでも己の羽を駆使して中空の一点に思い留まっている。その見事な空中停止は、どんな秘術さえも覆すほどの、時計台から踊り出た麗人の微笑である。この優雅な背景を、より爽やかな透明に、さらに高貴な漆黒に、いさぎよく変えてみよう。

朽ち果てた驟雨の生々しい泣き声が耳殻を激しく揺さぶる。まだ月はいくらかでも欠けているのだろうか。遠く浮かび上がった地平線を、白衣をまとった数知れない少年の長い列が横ぎる。その影が大きく眼球を包みこむと、わなわなと陽炎が立ちのぼり、球体の表面がおびただしくひび割れ、たちまち形が崩れて輪郭を失った。

盲目の鳥は、その衰弱した羽をぎごちなく慄わせると、何度か地上に落下しながらも、形を失くした球体の残滓をむさぼり啄んだ。羽の裏側はすでに赤黒く腐蝕している。力つきて鳥は分解し、無惨な骨組みをさらけだした。

こうして錆ついた骨を拾い集めながら、どのくらいの時が過ぎただろうか。石の上に鈍く重い腰をおろしながら、あまりにも暗い空に向かって、腐蝕しかけた羽を小刻みに慄わせた。

朦朧とした意識をふりすてようと顔をさぐってみると、抉られた眼窩の奥で、青白く光る眼球が、うっとりした目つきで執拗に指先の動きを凝視していた。

蝸牛の塔

岩井　薫

「蝸牛の町（ヘリコポリス）」は平原の遠くからは巨大な巻き貝を伏せたように見える、例えばすでに山や丘のような地形の一部と化した古代の建築群の廃墟である。対数渦巻きの形をとってゆるやかに上層部へ移行する求心的な曲線に気をとめなければ、それは氷河の侵蝕からとり残された硬い岩盤の塚や、火山灰台地に隆起した溶岩丘と容易に見まちがえられた。三層の渦をなして頂が円屋根（ドーム）で蔽われたこの建築物を、いまは滅びたその建造者たちは簡単に、――しかし旧友に対するような愛着をこめて「貝」と呼んでいた。

おびただしい遠浅の鹹水湖沼群が、ぼろぼろに綻びた蜘蛛の巣のように、まるで蜘蛛が老い耄れて修復の意欲を失ったとでもいう具合に、途切れがちに、ときには痩せこけた川のように細く、ときには小さな海洋ほどの規模に水を湛えて続いている。陸地はおおよそ二種類の部分からなっている。まず大部分を占める白い岩塩層であるアルカリ平原。そしてわずかに点在する、「生きる水」を噴き出す泉地である。「貝」の小さなものは、蘭草や葦の群生するこの泉地に近く分布していることが多いが、荒れ果てた平原のまっただ中にも、鹹湖の辛い波が寄せる岸辺にさえも多くの「貝」が見出される。太陽が照りつけている間は湖沼群や白い塩の大地の照り返しと、立ち罩める陽炎、また四六時中現われている蜃気楼のために気づかないことが多いが、日没の時刻になると遥かな地平線に黒く点々と、驚くほど多くの「貝」の影が見える。そのどの一つも大小の違いこそあれ、様式はまったく同一で、単純至極である。褐色の小さな石が整然と積まれ、間隙はセメントで固め、所々に窓が穿たれて採光の役目を果たしている。渦巻きの最下層の端に大きく開いた口は、時には幅二百メートル、高さ百メートルにも及ぶ。それは巨大な幾何学的洞窟の入り口を思わせ、内部は薄暗い迷宮めいて、人を奥へ招く不思議な吸引力をそなえている。

珪酸質の砂塵は山脈から風に運ばれ、白い大地の表面を長い年月をかけて次第に風化し続けて来た。風向きによって砂やすりは「貝」の表面に溝をえぐり、時には内部の空洞を見せる深い傷口を開いてしまう。断崖上などに建てられた「貝」が激しく打撃され続け、崩れはててされこうべのような無残な外

観を晒していることもある。

「貝」には多くの鳥が棲息している。これはその内部の空洞が強い日射を遮って涼を与え、また昆虫などの餌になる生物も見出されるためである。明け方、地平線を曙光が薄紅色に染める頃になると、「貝」の円屋根の頂に穿たれた天窓から、渦巻きに沿うて並んだ採光窓から、そして下端の大きな洞穴から幾千という鳥たちが羽搏いて飛び立ってゆくような大群棲地もまれではない。このような「貝」の内部は、床石に堆積した鳥の糞を栄養として苔や茸、羊齒類などが一大群落をなし、いわば洞窟泉地のおもむきがある。これは貯水槽や深い井戸などの工夫によっていまだに水が得られる「貝」において殊に著しく、内部を一面の苔や草に蔽われ、季節になれば花さえ咲き乱れている。

「貝」は遥かな遠い昔に一種の城砦都市として建てられた。広い最下層の両壁面に沿うて五十～六十戸の窟状住居があり、その間の広場の中央には「生きる水」を深い地下から汲み出す井戸があった。ゆるやかに傾斜して上昇する第二層には、通路を挟んで家畜小舎、家禽小舎、醸造所、製粉所、パン焼き場などにあてられる部屋がしきられていた。そして円屋根に蔽われた最上層は図書室であった。ここは僧房のように小さくしきられた写本室に囲まれた円形の広間で、写字生たちの労作が巻き物に装幀されて所狭しと積みあげられていた。この部屋の中央に巻き物が置かれていない小さな円形の空間が残され、取り外しのできる床石の一枚を持ちあげると、そこは「穴」に通じている。「貝」のすべての層の内側の壁の裏面が、負の円丘の形をした第二の空洞をなし、「穴」と呼ばれていたのだが、ここは影の地帯、死者たちの領域である。こうして、最後の住人が葬られた後は――他のすべての都市の廃墟がそうであるように、「貝」は墳墓に他ならなかった。

いまでは、鳥や山犬をのぞいては、「貝」を訪れる者は放浪の民だけである。彼等はこの土地を何千キロも、独りで、徒歩で旅する。ごくまれに彼方の岸辺の王国までさまよい出る者もあったが、彼等の行動範囲は原則として「貝」の分布範囲にほぼ一致していると言えよう。男も女も、この一族の者は

胴衣の腰のベルトからナイフと、ふくろねずみの皮の革袋を吊っており、ひつじらくだの皮の外套をまとって、男は藺草で編んだ、つばの広い帽子かフェルト帽をかぶり、女は腰までのびた長髪をまん中から分け、外套に付いた頭巾で蔽っている。荷を負わせたひつじらくだを連れている者もあるが、多くは狩猟道具やごく少量の携帯食糧を入れた袋を肩から下げて、山犬を警戒しながらただ独りで歩いてゆく。

彼等は複数で行動することはごく稀で、大あほう鳥のように、ごく小さいうちから独りで旅することを覚える。困難な採集・狩猟、あるいは部族の重要な任務のために独りで旅をし、いずれはどこかへ帰還するという性質の旅では決してない。彼等の誰一人として帰還すべき母集団を持つ者はなく、鳥のように「貝」を定住地とするわけですらないのである。この大地が荒れ果てる以前から根をはっていた老樹の蔭、岩棚、海のほとりの砂丘……彼等が夜を過す場所はいたるところにあり、そこで彼等は天幕も必要とせずに、外套にくるまって獣のように息をひそめて眠る。

この平原に「貝」を築いて、湖沼群を平底船で渉った民族は、おびただしい幾何学的廃墟を残して大地に不思議な分節を与え、またさらにその先住者であった者たちは、その頃ひろびろとした海洋と群島からなっていたこの領域に――ごく僅かでしかもかなり風化されつくしてはいるが――港湾施設の遺跡と船の残骸を残している。それに比べて、この放浪の民が滅びた後には彼等自身の肉体が――鳥や獣に食われさえしなければ――化石となって残るだけだろう。彼等は書物はおろか、書きしるす文字も、そればかりか何ともおおらかなことに自らの言葉も持たないのだ。

彼等はひつじらくだの膀胱で作った袋に同じ動物の乳を容れ、何もない荒野をわたる時は、七日間もあるいは十日間も、毎日それを一口ずつ飲み、大切にしているが、それを呼ぶ言葉を持たない。あるいはかつては持っていたが、必要がなくなったのであっさり忘れてしまったのである。

ごく稀にだが、しかし確実に、旅の途中で彼等同士が出会うことがある。大きそりを踏まぬように注意深く、狩りの獲物であるふくろねずみやうさぎかもしかを追っている途中、あるいは衣服を全部脱いで湖沼の岸に置き、水中でジャックナイフのように体を撓めて銛を片手に魚を追っている時、突

然相手の存在に気づく。そのような時、相手が初見参の者か、あるいはかつてすでに会ったことのある者であるかは大した意味をなさない。彼等は相手の存在を意識しつつ、その場で何らかの意思表示をすることは決してなく、相手から一定の距離を保って当面の作業――単に歩いている、あるいは樹の下に坐っていることも含めて――を進行する。彼等は互いに相手から一定の距離を保ちながらその時＝その場所に到るのを待つのである。その時＝その場所が《満月の夜＝貝の一番高い部屋》であるのか、あるいは《満潮時＝古代船着き場》であるのかは場合によってことなり、彼等は時としては何日もかかって旅を続けながらその時＝その場所に到る。

その時＝その場所で彼等は相手を選ばなければならない。このささやかな見合いの選考課目は、しいて言えば一種の踊りと言えなくもない奇妙な儀式に限られており、その表現の仕方は各個人によってことなる。

その時＝その場所で彼等は互いに演技者＝観客となるとも言えよう。すなわち彼等は相手の演技を視つつ、自分の演技を相手に視られるのだ。何を演じるか、その主題は生と死、自己のあるいは他者の来歴、泉地の夢、神、鳥、魚などさまざまである。表現方法として、葦笛を吹きながらじっと立す者、古代の巻き物にくるまって長時間黙って佇ちつくす者、性行為を模倣する者、「貝」の周囲を疾走する者もいる。この儀式の結果、彼等は相互を選び、あるいは選ばない。選ばれなかった者はただちに踵をかえし、ひつじらくだの皮外套をひるがえして、遠い砂塊の平原を再びただ独りで歩いてゆくが、選ばれた者ははじめて出会った二疋の山犬のように、ここで敵とならなければならない。

彼等は互いに殺害者＝犠牲者となるとも言えよう。胴衣の腰のベルトに帛ったナイフを引き抜き、死に至るまで互いに刺し違えながら、彼等は人称を交換し、《わたし》と《あなた》の合わせ鏡の間を無限に往復してやがて無限の連続の極小の方へ遠ざかる……

翌朝、地平線に曙光が滲み、「貝」に棲む鳥たちはけたたましく囀り羽搏き、まもなく平原中の「貝」という「貝」に棲む鳥たちがただ一カ所を目指して、光溢れる半球を翔けて集まって来るが、群がる鳥たちの翼の下のどこを捜しても、すでに《わたし》もなく、《あなた》もない。

月の魚

立木鷹志

店の名前は忘れたが、先日、日比谷の東宝ツインタワービルにあるエスパースジローの上の喫茶店で、ある女性とお茶を飲んでいた私は、「ここは異次元の世界のようね」と言われて、改めて自分の精神的偏向に気づかされたのだった。

エスパースジローという店は、B_3からB_2まで吹き抜けになった天井に、小さな電球が満天の星の如く下がっていて、私達のいるB_2の回廊状の喫茶店の硝子を通して見下ろすと、宇宙の涯てから〝星の絨緞〟を見るような印象を覚え、私は好ましく思っていたのだが、相手の女性の表情には、その店が好きとか嫌いとか言うより、寧ろ、宇宙の涯てに一人ぽっちで捨てられた自分をどうしてよいかわからぬといった不安のようなものが現われていた。更に言ってみれば、その表情には、そうした状況を精神の抽斗の何処に仕舞い込めばよいのかと戸惑う自身を懸命に怺えているような気配すら窺われて、私は、自分が好きなものは他人も好きな筈だという愚かな思い込みに軽くしっぺ返しをされた格好で、その場を取り繕うために異常な饒舌に陥る醜態を演じたのだった。その店を好む女性客は意外と多いので、その反応はその女性特有のものだったかも知れないが、或る点で、彼女は正確に私の偏向を言い当てていたとも言えるのである。

つまり、私の精神には、どこかにこの世界を全的に把握したいという欲求があり、そのためには、常に自分を世界の外に置いておきたいという根強い願望があるのである。それは、子供の頃の、遊びにかまけて日が暮れて、不安を抱いて家路についた途中で民家の団欒の燈火を見たときに覚えた安堵と羨望の入り混った甘い思い出や、隠れん坊をしていて、あまりにも完璧に隠れてしまったために一人取り残されてしまったことがわかったときの孤独と不安の混淆した奇妙な充実感に由来しているものかもしれないし、或いは、病弱だった十一、二歳の頃、毎朝家の脇の道を登校する友人達の声を聞きながら床に臥していたために、私の中に根強く居座ってしまった孤独への愛着のせいかもしれないの

であるが、その一種隔絶された感覚が、宇宙の涯てからこの世界を見たいという欲求や現実の裏側から全てを見てみたいという偏執になっているのであろう。

肉体は悲し、ああ、われは全ての書を読みぬ。
逝れむ、彼処に逝れむ。……
（岩波文庫『マラルメ詩集』鈴木信太郎訳）

この詩句のごとき度し難いまでの私の性癖は、いかんとする術もなく、日常にも時々顔を覗かせるのである。

＊

昨年の十月の日曜日、町内の慰安会でハゼ釣りに行ったときのことである。私達は、町を流れる中川を釣舟で下って、東京湾内へ這入った。季節がら、途中何叟もの釣舟や小型の遊覧船やモーターボートが出ていて、釣り始めたのは十時を廻った頃である。釣った魚を天ぷらに揚げて昼食にと準備して行ったものの、一向に釣れず、それを見越して持って行った魚を揚げて食事を済ませた。十人以上で、釣った魚は七匹。元来、釣りよりも舟上での酒宴が目的の会であるから、釣れても釣れなくともおおらかなものである。

ところで、その日私は、川を下って行く舟の吃水線から見た川幅の広さに驚かされたのだった。水面を滑るほどの位置に視点を置くと、普段百米くらいの幅の川が、たちまち、まるでアマゾン河のように満々と水を湛えた大河に変ってしまうのである。水泳を覚えて間もない頃、この川を泳いで渡ろうとしたときの川幅がふいに私の脳裡に浮んだのだった。都内に這入って、川岸にコンクリートの堤防が現われたときの偉容にも驚かされた。岩壁のようで、その下で釣りをしている人々の姿が巨大な

岩山を背にしてキャンプを張っている登山者のようにも思われてくるのだった。いくつかの川が合流する河口に来ると、海水の逆流を防ぐ巨大な鉄の水門がまるで真紅の城塞のように見える。そして、次々に潜り抜けて来た架橋は、裏側から見上げると、まるで内臓を開かれた動物のように、ガス管や水道管や種々のケーブルが走っていて、日頃の川を渡るためのものとは無縁の容貌を現わしている。それは、いつも川沿いを歩き、幾度となく走っているときには思いもつかない容貌であった。

左手の青空にやや霞むようにして西洋の城館をかたどった建物が見えたとき、誰かがもう酔いの廻った声で、「あれがディズニーランドだって」と言った。すると、ひと頻り、その話題に花が咲いた。「来年の四月オープンだって。子供を連れて、行って見ようと思うんだ。何しろ広いんだって。後楽園の十五倍もあるんだって」「あの辺りは何処だろう」「浦安。浦安の埋立地に出来たんだよ」

ディズニーの城が大きく、明瞭に見え始めて来たとき、舟は砂洲の間を抜けるように大きく右へ廻って、進路をとった。皆、名残り惜しげに後を振り返っているが、私はそれよりも、日頃の川とは異った顔を見せる川の変貌に気を取られていた。

すると、その時、ふいに大きな声が揚った。

「駄目だ！　駄目だ！　船頭さん、そっちは違うよ！」

モーターボートに乗るのが道楽で、皆から〝キャピテン〟と呼ばれているNさんだ。舟が狼狽てて進路を変更したその辺りの水面には、先端に白い布切れが結んである細い竹の棒が何本も見える。

「この辺りはすぐ様子が変っちまうんだ。俺もこの間やっちまったのさ」

Nさんが言った。どうやら、舟は浅瀬に乗り上げるところだったらしい。昔から川と馴染んで来た町なので、川に詳しい人は沢山いるのだが、船頭ですら間違うほど様子が変ることもあるようだ。

帰路についたのは日が落ち始めてからであった。上げ潮時の川面は、河口から上流に向って波打ち、水銀の表面のように丸く持ち上がって、鈍く光っている。他の船も戻り始め、一緒に並んでいる船同士声を懸ける。

「どうでしたか、獲物は？」
「今日は駄目だね」
〝誰そ彼時〟という言葉どおり、薄暮に包まれて、相手の表情は見えず、声だけが闇の中から届いて来る。川岸を走る自動車の列もヘッドライトを点し始めた。
架橋を潜ると、それは大きなドームのように頭上を蔽い、舟のエンジン音が異様に大きく響き渡る。
その名前はわからないが、上げ潮で膨れ上がった水面と橋との間が極端に狭くなっている架橋があった。その手前に、まるで弧を描く鷹のように、同じ場所をゆっくりと旋回している船の影がある。近づいて行くと、朝一緒に並んで下って来た小型遊覧船だった。
「連中、大きすぎて通れないんだ」
Nさんが揶揄するように言った。
「頭を伏せて！　首を出すと危いよ！」
怒ったような船頭の声で、全員が舟底に身を潜めて小さくなる。私は、大分酔っていたので、他に〝睡〟ている者と一緒に仰向けに寝転んだ。
暮れなずむ空に細い月が浮んで、金星がいくつかの星を連れて輝き始めていた。と、ふいに視界が暗闇に蔽われ、私は奈落に沈んで行くような感覚に囚われた。エンジン音だけが、酔った私の心音のように響き渡っている。それは極度の貧血状態に似て、外界を見詰めようとする意識だけが働いているものの、何ひとつ見えない奇妙な時間だった。その眩暈にも似た暗闇の中にいたのは、ほんの数瞬間だったろう。やがて、ふいにその暗闇の中空に、一本の針のように光るものが現われたのだった。
舟底に仰臥する私の頭上から現われ、静止したままのその物体をじっと凝視していると、それは、架橋のコンクリートの継ぎ目が崩れ、その間から向う側の光が射し込んでいるのだった。私は、舟の動きとともに近づいて来るその光から眼を離さず、ずうっと見詰めていた。その細い光が舟底に仰臥する私の恰度正面に来たとき、暗闇の裂目のようなその隙間から真直ぐに夜空が見上げられ、その中

に、柳の葉のように細い月が銀色に輝いて見えたのだった。それは、月というより、水中でえびらを翻した魚のように思われた。譬えるなら、向う側にあるもうひとつの世界を、太宰治の『魚服記』の少女の変身した魚が泳いでいるかのように見えたのだった。そして、その世界を遊泳する銀色の魚をもし釣り上げたなら、この舟上で再び少女に変身するかもしれないような、或いは、私自身がその魚と共感し得るかもしれないような気がして、私は、その時初めて、すぐ横にある釣竿を取り上げ、釣糸を暗闇の隙間に垂らしたい強い衝動に駆られたのだった。

しかし、その時間は一秒の何分の一という短い間のことで、次の瞬間、再びすっぽりと暗闇が視界を蔽い、更に何秒か後に、舟は橋を潜り終えていたのだった。

すっかり暗くなった夕闇の中で、少し離れた岸辺には自動車のライトが長く長く連なってのろのろと動いており、夜空には何の変哲もない月が浮んでいた。その日常の光景が視界に戻ると、数瞬前の出来事は、あの架橋の下の暗闇の中で見た夢であるかのように思われ、自分が釣竿を手にしようとしたことが不思議なことに感じられて来るのだった。

空中の書

紙田　彰

窓から覗くと
沐浴する異国の女のような
幽霊だった

肉体の運命

死者の肉を
剌身にして弔う風習を知ったのは
露地裏で少女と遊んでいたころだ

満　月

夜は来た　妖しい吐息が褥野に広がってゆく　頭上に爛々とかがやく紅蓮の月　おお不吉な満月よ　腔腸動物のように毒液を撒きながら人民を失神させる

贖　罪

古来、夜の使者と馴染み、悪虐非道の律法を糧とし、巻貝の好餌として封印された王国の名　ああ恋という魔の温床
――おれは幼友達が夢に現れ出、細長い蛇に転身してまとわりつくのを知っている　そのとき体が浮游し、最愛の妻の乳房に手を伸して許しを乞うのだ
祝祭の日が来た
礼砲が鳴る

声の届かぬ部屋Ⅰ

魂と肉体を分つ術を用い
窖(あなぐら)の中で修練する
静止しているものに
命を吹き込み
禁断の音楽に耳をすます
数億の眼と失笑
涸いた岩肌をたどり
亀裂の中に這入り込む
見えざるものが見え
暗い危険へと下降する
知りうべきはいま
風に揺られて
死の床のぬくもりを

声の届かぬ部屋Ⅱ

頭蓋骨にしまった
罌粟(けし)のうすい花びら
インクのかすれた紙幣
怪しげな深夜の誘惑

約束の地への招待状
ひとたびまばたきすると
黄金の都市
ふたたびまばたきすると
悪相の神々
手を触れたときには
光の箭が
夢をつらぬいている

声の届かぬ部屋Ⅲ

青鹿毛の馬の背に
咒文の書かれた服を着て
闇に溶ける者がいる
しだいに数が増すかと思うと
一箇の鏡であったりする
肘に疼痛をおぼえ
こうして肖像を描いているが
いまだ精神の愛撫
めまぐるしい確率論
黒革の手帖に
新たなる神の名が加えられ

不浄の匂いが広がっている
数字という名の首

声の届かぬ部屋で

包みを開封すると
押花の罌粟と
頭蓋骨の破片とが
雪のように
部屋を蔽った

宇宙モデルとして
愛していたおまえのかけら
不思議な匂いを醸す
透明な和紙

いまや　便りを告ぐるべき夜
夜を忘るべき睡りの中で
壁をへだてて
硯をする音が
鼓膜につたう

透明な卵

球体の中に世界が視える
老いた書誌学者の説によれば
つがいの巨人族の
幾何級数的な交接
青みがかった眼の彼方
降る星も消えずに

壁の中に埋る耳
通廊に貼られた登音
樹齢一千年の黒檀製テーブル
タップダンスを踊る
女の細いかかとが
鉋に削られたように
ガラスの部屋に喰い入る

戦争の夢を語る少女
やわらかな臀の奥
硬質の乳
なによりも尖った臀
体内における血の嵐

殺人者の盥

烟る海へと漕ぎ出してゆく
龍の刺青を誇る腕
数億の日々が
数億の波の棘を渡ってゆく

いま
階段の下に
ゆらめく卵が
夜の神秘を映す
白髪の友の声音ひくく
ひらたく伸びた掌に
滴となって
燃え落ちる

頭蓋骨モデルから伝わるもの

闇の傾斜を、張りつめた糸が重なるように、かさかさに涸びた雪片が滑ってゆくのを聞いた。カーテンの隙の隙間から冷たい風が忍び込むせいでもあったのだろう。骨が噛みつかれるように深い冷たさが肉を包んでいる。それにつれて体が底なしの睡りに就いてはいたのだが、脳味噌は奇妙にうごめきはじめ漫漫としていた。肉が溶け出して床に吸われてでもいるのだろうか。

姿勢だけは謹直なものであった。背筋はきりりと伸ばし、直角に曲げて揃えた両脚の上、ちょうど臍のあたりで呪印さえ結んでいた。瞼を開けようとしたが、固く結ばれたままいかようにも開けることができない。だが何かしら周囲のもののありようが、そのままの状態でも感じられた。特に強く捉えられるのは、机上に埃にまみれたまま放置されている頭蓋骨のモデルの形である。温かなものと冷たいものから発せられる微妙な空気の運動などといったものではない。確かな触覚を伴った明瞭な形である。

数年前に知人から器粟の一種を押花にしたものを贈られ、それをモデルの中に蔵っていたことを想い出していた。その薄い花びらの透き通ったピンク色が記憶の底から泛んでくる。モデルの中にはもう一つのがらくたが匿されていた。それはジルコンを象嵌した、銀製の、人面をかたどった大きな指環である。異国の骨董屋で買い求めたのだが、女主人の言によるとコメディアンのマスクとのことである。けれども唇を耳まで開いたその顔は俗悪で、いささか呪われたものででもあるかのような畏れを伴っていた。その相貌の面妖さが明瞭に頭の中に感じられる。見えるものは何ひとつないのにすべてが感じられる。奇怪なる至福とでもいえそうな一刻である。骨格だけを残して、肉体と呼ばれうるあらかたが失われてゆく。まるで聖遺物器の重なりのように。……

古い砂

砂上の皺に数十億の蜜蜂が群っている　独り涸いた丘陵を駈けたのは瞬時の眩惑であったのだろうか　はじめのうちは黝い眼窩の底から徐々に湧き上がる妖気に怖気づいていたが、輪郭の透明な曲線が肉の色を帯びていくのを知ってからは、魂のこがれるような戦慄にいつしかうちふるえていた　鼻梁の欠落した首ははにかむような微笑を漏している　爪の間に入り込む砂粒の多くは

硝子質の光沢をもっていたが、掘り進むうちに塩のように重い物質に変じてゆく　子供のころに海岸で犬の白骨をみつけた記憶が掠める　たしかに爆竹を鳴らしながら走り廻った当時には、何もかもが神秘で優しかった　蜜蜂は管を伸して塩の谷間を埋めつくしている　匣の中にモザイクの縫い取りをした布がたたみ込まれていた　紫の地に黄と白の糸で縁取りし、中央にかすかな王家の紋章が刺繍されている　その首は犬のものではなかった　前頭葉の巨大さを物語る額の広さが不吉な印象をもたらしている　砂に同化せずに過ごした、考えることのできぬ永遠の時よ　砂漠の齢を超えた空想の古代よ　ある田園詩人はその奇蹟を書きとどめる術はないと断言する、解明できない自然は言葉の矩を越えているからと　いま机上に鎮座するその首は遠い謎を語っている、精神の奥深さというよりもっとも原始の底から慰安をもたらすもののごとくいまその首は流れるような声で語りかけてくる　もはや寸秒の夢　夢に巣くう夜　そして彼方から押し寄せる危険　王家とは生成そのもの、破滅そのものの源をなす邪悪な波頭　蜜蜂の一匹を指でつぶしてみると黄金の砂よりも硬く冷たい液体がこぼれでる　骨の粉が崩れおちずに光っているのだ　睡りに就くことは禁じられている　死の床は星々の距離で測ることはできない、死の床は、死の床は……　妹の寝台にあふれた胃液が妹の影のように貼りついていた　二十数年を経て話してみると、当時と変わりのない喋り方で、抱いてくれとせがまれる　いま十数世紀を経ようとも、抱いて離さぬ夜は暮れない　重たい塩の地の果てよ　涙の中に原始の塩もあり儚い古代の氷もある　死の床につづく愛すべき首よ　罌粟の花びらに満たされてあれ、永劫の期待を蔵うために

道

夕暮どきともなると、樹々のざわめきの奥に見え隠れする獣の対になった姿をみとめることもある。

館まで小一時間ほどの細い道を、そんな獣たちの挙動を盗み見しながら登りつめてゆくと、さほど高くない丘の頂が手の届くような近さにあると思われて、つい手を伸ばして、届かぬ肉体の限界と飛びゆけぬ精神の力の足りなさに歯がゆい心持ちが生じ、軽やかな足どりの障碍とさえなる。人には住むべき処と見うべき性質の夢など、歴然として何もないのだということに立腹してみても、さしたる問題にもなろうとは思われぬが、かといって、翼が生えて蒼穹にはばたこうなどとは考えてみた試しすらない。

古代、青い、あまりにも深い碧の内海で水底に舞い落ちた慢心の少年がいたという話は有名だが、そのような慢心のありようもわからぬではない。

獣道のような、わが眷属が拓いたこの道を淡々とした思いで進んでいると、いつしかこの道の絶ゆる先は弓のように反り返って、ちょうどスキーの跳躍台のように、限りのない大空の彼方にしなってゆくのではないかという妄想に捉われるのだが、心の奥底では、あながちそれが幼児的な空想でもないのでは、という一種不吉な病が頭を擡げはじめる。

唇の赤い少女

睡りの前に少女のかかとを見る　ガラスのように尖った神秘が眼の中を疾る　ほそい骨とアンスリウム、夢を充たす妖しい香り　階段は世界の貌　風とともに日々を駈ける　えたいの知れない白い影が背中を蔽う　喉が竭く　手を伸ばして冷たい水を啜る　ビールは明方のためにとっておこう　烟草が泛る　隣には裸の女が眠っているので音楽は流せない　あなたのために父の通夜を準備するわ、死者の肉を刺身にすると魂は永劫不滅よ　扉を敲く音は精神に悪い　掌は手首のために造られ、指は心臓を摑むためにある　電車の中で黄色のブラウスを着た娘を眺め、返された視線に頭がかすむ　西瓜の種が絨緞に埋っている　鳩尾の疼き、力のない咳　ほそい露地で自殺し

た男の密葬が行われる　夏らしくもない長い雨、一人三合と書かれた貼紙を見ては独酌の手もふるえる　あたたかな女児の膝に触れて見上げると、童女は死体を刺身にしている　澄んだ瞳と真赤な脣の童女の首はない　羽蟻が涌き出し建物は水蜜桃のように朽ちてゆく　夜明の晩、後ろの正面、童女の群が不吉な輪を作る　教室で食事をしている子供らの前で、禿頭の男がコッペパンを御幣にして神妙に坐っている　扇風機から洩れる古い風、呼吸をおびやかす風　絨緞に埋った骨はみつからない　戸棚から銅貨を盗み出した少年は翌日まで帰らない　化石を採りに山へ登ると強姦現場に達していた　ハンカチーフには血のしみがつき、後ろに置かれた少女の指先には涙睡魔とともに雨が降る　軒下の下着が盗まれる　少女の膝は成長にしたがい冷えてゆく　地下鉄のホームで会ったときには疲労の色が濃い　緋色の衣裳が翻る　顕微鏡を覗くと、尻尾のある無数の悪魔が蠢いている　教師は少女を集めて秘密の講義をする　数日後、辞令が出て僻村に逼塞する　色の黒い女生徒が後をつける　ほそい脚には投げやりな愛、シャツを破ってからは二度と出会わない　漁港で身を持ち崩しているに違いない　肌色の鳥が四肢を広げて夢の空を翔けてゆく　醜くもあり美しくもあり、眼の中はいぴつに

魂の滋養

受話器から洩れる魂の誘惑　あくことない耽溺　室内の細い光が街路へ抜ける　電灯の軋みを合図に地図に記されていない町まで疾る　到着したのは約束の刻限を大幅に超過してからである　暦の下で困惑する少女よ　廻転扉から歴史は始まる　青い紬（つむぎ）　アルミニウムの鏡板（パネル）　古色蒼然とした円舞曲（ワルツ）　腕の交叉は下半身にて破られる　折れ曲った肢体から尿のように噴き出る夢　魔物の影が漂う　長い鎖を静かにインク壺に漬け夜啼きの鳥を描く　闇はいっそう深まりついに凝固する　仕掛けのある空箱に棲む花嫁　蜥の恋人よ　純白の下着が義歯とともに外される　瞑想な

ど不要だ　皓々とした珠玉が爪が言葉が黒々と伸長している　南の島の砂浜では五色の慾望が瞼の下では蠟燭が　天井から風がそよぐ　星々の移動が突発的な予定調和をしでかす　いびつな乳房　二つに割れる乳暈　鋭い腰　沈み込むような尻　深く愛すると肉体は泥になる　頭脳も鬱血する　髪の毛に毒虫が貼りつき赤い舌を覗かせて冷笑　季節が外れると関節に痛みが疾る　押し寄せる齢とは一条の螺旋であろうか　背中から尾へと向う刃物　魚の臓物に南十字の吐息が匿され旋毛風が舞う　水道路の遺跡から登場する生物は両足を揃えて跳躍しながら磁気を食す　星間物質は倉庫で逼塞している　おお鏡の中で燃えつきる踊り子(ダンサー)よ　挨拶を交わす　さすがに疲労は隠せない　面影のうちに種属もなく調理人の熱いまなざしもなくただ往き来する書物の記名がなびいている　たとえば硝子張りの字引とか棲処を失った羽虫　溝の消えたレコード　かすかな思い違いから鍵を紛失する　ひからびたしがらみに映じる幼児の幻惑　祭の爆竹がはぜる　走馬灯に初寝の影が添えられる　地震の起ったときに寄宿舎の屋上から海の彼方の炎を見る　洗濯物は竿に吊られて濡れている　電信柱には骨盤　嫌な顔をするな　鉄拳が飛ぶぞ　裏通りには首のない変死体　壁の中には数奇の運命を終えた老婆　館には魑魅の出没の儀　夜は更ける　いやまして絢爛の夜　数軒の呑屋を経ても薔薇の花束はしおれない　睡魔の中で次々に裸にされる少女　低温で茹られる黄身　女どもが真っ先に弑される　恋人を下水管に流した男が強力な下剤を服む　受皿に果実の種が落とされる　体を引き緊め酒をあおる　夜風が実に快適だ　遠心力の効用とは　客船を見事に沈没させる点にある　緩慢な波を分けて蒸気機関車が青白い烟を吐く　海底に向って老衰する　古代語は白蟻によく馴染んでいる　ともに魂の滋養だ　筋肉から弾き出て素敵に印象的な紅蓮の布となる　めくるめく即興曲　幻妖なる画布　不思議の国の扉　不眠症の決り文句だ　柱時計が酸化する　火傷を何度も負う　夜が明けても空は暗い　羽を借用して雨の朝を渡ろうか　空白の数行とともに

緑字生ズ

紙田　彰

序　妄想ヲ生ズ

彼ハマズ世界ニ対シテ復讐ヲ敢行ス。ソレハ己レノ存在ヘノ謝罪デアル。
彼ハ親兄弟ヲ殺戮ス。ソレハ身体ヲ流レル血ノ譴罪ナリ。
彼ハ偶然ヲ誅殺ス。ソレハ必然ヲ居ルコトヲ使命トス。
彼ハ世界ノ歴史ト一心同体デアル。
彼ハ世界ノアリウベキ姿ヲ無ノ淵ニ陥レル。
彼ハマズソノ性無垢ナルヲモッテ、無垢ナルモノト交感ス。
彼ハ表面上努メテ凡ナルヲモッテ、行動ノ非凡ヲ成就ス。
無垢トハアリウベキモノデアッテ、神秘ノ側ノモノデアル。
彼トハイッタイ何者カ。

世界ハ単純ナ錯誤ニヨッテ存在スル。
悲哀ノ根ハソモソモノ初源デアル。
世界ハ悲哀ノタメニアリ、悲哀ニスギナイ。
悲哀ハナニモノニモ捉ワレヌ点ニ起因スル。
サスレバ初源ハ錯誤デアル。
ツマリ初源ハ存在シナイ。
存在セヌモノハ夢デモアリエナイ。
デハ、世界ハソモアリエナイノデアル。

ワガ声ハ、ワガ腕ハ、幻ホドニモアリエヌノデアル。
デハ、ワレラハ何者デアロウカ。
ワレラハアリエヌモノヲ見ウベキ不可能デアル。
不可能ハ存在シナイ。
ワレラハ現ニ存在シナイ。
マシテ、ワレラノ頭脳ソノモノトイエル絶対ハ
夢想ノ夢想トイウ無意味ナルベキモノ。

世界ハアリエモセヌモノノ想像力ニヨッテ成立スルトイウ無意味サ！

千年ノ悲哀ト孤独トハ、
世界ソノモノガ夢想デアリ、
ソレヲ夢見ルモノモ夢想デアリ、
夢想ノ永劫循環トイウ存在ノ無効性ニアル。

無効トハ失業、ツマリナニモノモアリエタコトハナイ。

緑字生ズ

1

nerve fiber の先に
太陽がある　雲がある
空はまた黄金
海には静謐が映る

人と人とに毒を盛る
雨が降り
夜がやって来る

わが手は全季節の果物なり

2

Vの字になって発狂する
碧の湖が小波のために淡い
旅のさの
夕焼空と雁の群
太陽はいま沈む
断頭台の首も——

わが対称形が歩く

秋の風がつらぬく
あてどない旅
ポプラよ、銀杏よ、楓よ、
雑木林を渡る風

いつのまにか海に出ていた
しぶきに見え隠れする巌
また島は動かず
地球が母の姿を現わす
ああ　心が凍る

秋の終わる日
人も自然も枯れてゆく
毒草が地軸の折れ目につぎ込まれる
眠りに包まれ
わがメランコリイの果て

死者もまた同じ
夜汽車よ、海と星よ、
暗い波打ち際に
想い出は寂しい

別れの花を摘む
闇の女の裸体
銀色の毛皮に抱かれるころ
初雪はふるさとを訪れたろうか

月の涙は蒼きもの
昼間からうっとうしいのに
月光と雪の白い道
月のかけらよ
粉雪に埋る夜々

長い道を歩いていた
なぜそのような無用をするのか
いつまでたっても謎である

土色の骨が指からつきでている
純白のカモメが
山の端で赤くなっている
雪が燃えているからなのか

時が割れる
吹雪、一瞬の吹雪
鬼のような目つきで神に祈る
空が晴れて窓から覗くと
光のほかには何もない

風が吹く
そのたびに涙する
雪が降る
そのたびに涙をこぼす

悲しいことなど何もない

3

地平線が破裂する
みはるかすばかりの原野
切れ間なく降る雪
夜はいっかな明けようとしない
大粒の結晶に興をそそられた少年は
首なしの天の奥を仰ぎ見ていた

そのプラスチックの詰め物の中で
雪はとどまり
ひととき降りやんだかに思えた
少年は暗黒の夜をうち眺めている
ありえもしないことだが
粉雪のような星が
全天を蔽った
流れ星すら
千里を
駆る
夢は時間じゃない
幻惑の光は
少年をめざしていた

けれども

空には厚い雲がかぶさり
原野には雪が降り積もり
眠っていたとき思いだした眠りのように
世界が埋められる！
少年の耳はその重みで垂れ下がり
少年の眸は円錐状に尖り
頬からは熱が失われていた
世界は凍っている！
少年の裸が氷のように崩れ落ち
少年の雪が舞うばかりであった。

4

死体が雪の中を走っている
満員電車のスパーク
こま切れにされた死体が
糊のように地面に貼りついている

5

函館山、西の浦、宇賀の浦
腰まで落れて告白室を出る
鷗と北極星
格子窓に凍りついた
緑の卵

6

女よ、まなざしだけの女よ
妄想のほほえみ
一秒が百年となる
赤い唇が永遠に去る

青い空を閉じる
港では汽笛がなる
雪の精は寂しい
少年は
名前のない少女に恋をする

女よ
尖ったあごと
あどけない口もとの
寂しげな女の
天使の顔は
永久に謎である

7

人が生きているというだけの手
悲しみの涙をぬぐうだけの手
あたしの手を握ったのはあなたね

あの日以来　あたしの恋心は永遠よ
この編物を捧げようと　かれこれ百年
ほんとにあたしの手ってのろま！
愛を知り初めたとき
もう濡れていたのよ
だってあの日は雨
傘を持つ手に滴のかかる

手を空に向けて
光を捜るが
どうせぼくは不始末の子
太陽を握りつぶす
そうすると宇宙は幻——

8

悩みに敢然と立ち向かう苦い魂
ただ激しく生きるこの苦さ

ミューズ
アフロディテ
また人魚たち
ぼくは龍にもなろう
ぼくはあぶくにもなろう
おお　優雅なる破滅

9

夜の影
書物の病よ
夏がかすかに開いている
あつい欲望につらぬかれている

その頁の間
夜の光と狎れ親しんだ
夏がかすかにふるえている
その色は色を失いしもの

はかない夢寐
はかない悲哀
魚から進化した魚の意識
朝はただ朝である

10

足をとらえる氷
道路はゴム棒のようにはねている
真珠の中の声
恋唄にこたえて波が割れる
紙のめくれる音
すさまじい貪欲
波のような肉体

つまり青い骸骨
口笛を吹いて
詩を書くのをやめる

緑の光の下で
マラソンランナーが坂を上がると
肩口にハンガリアン・ラプソディーが流れ
早朝の距離はちぢまらない

11

しぐれる墓のどくろのじじい
しぐれる墓のどくろの踊り
やみの話
不思議なくらやみの話
いずれも　やみのさよなら

12

歯ぎしりする
棘が深く刺さっている
針のない時計
恐ろしいものが靴の中に潜んでいる

あぁ　悪魔
夜の園をみたす

憎しみと至上の愛
沈黙と昂奮
バラの花束が恩寵となる

13

深き御山の彼方
精霊どもの踊りの輪に
寓ともつかぬ御身の姿

さまよい歩き訪ぬれば
いずくに棲むか御身の炭
睡蓮の湖はたまた森の奥

御身の声に誘われ
涙も切なく思われて
黄泉の水辺に悪魔城

吾は御身の囚われ人
天使も愛に堕落する
血と殺戮の嵐をわけて
魔のものにならんとぞ行く
死の居城

14

Tonarが跳躍する
栄光の灰が降る
賭博場の隅でぎらぎら光る宰運
深まりにつづく道
運河に沿って大陸を捨てる

待つこと
待機するというひと眠り
洛陽に帰れ　洛陽に帰れ
春の日差しの
悲しい微笑

わたしの渓間においでなさい
夏が近づくと
わたしの汗が
とても切ないのです

黄河（ホアン・ホー）　燃え上がる天と地

15

ぼくの脚は一つしかない
ぼくの眼は一つしかない
けれども

夜が暗いからではない
妹の死の床に
黄色い体液が残される

16

真夜中の夏
紺碧の空にトランペット
犬族の遠吠えを聴く
女の目の中にある雨

潮の流れが冷たい
砂浜は濡れているが
女の寝床はさらに悲しい

ニセアカシアの梢がゆらゆらと
夏は去った
雨雲が蝟集して
小窓の隅に
白い花びらが落つ

宿六よ、また旅へ

17

涙するグアナコ
スケートに乗る異国の少女
この世の time を
あの世の time にすり替える
秘密の会話が
またとぎれる

18

豊かな農園が
海をへだてた半島にある
子供らの奇怪な成長が
むくむく黒雲となり
雷雨が、密林が、
古代の神々を弔うという

19

落葉松と遺跡監視人（フィラッファス）
赤土には
秋風とともに
ファルスが生える
白い針で刻んだ女の名を
ペンキで塗ると

雨にうたれた一枚の枯葉が
青史に残る

20

銅鑼が鳴る

メルボメネー
ああ　秋の深い湖
裸女の像が永遠を見つめる眼で
命を光らせている
また季節風が吹く

甲板に出て
貝殻でできたパイプを拾う
ここも去らねばならぬ
みちのくの旅は終りぬ

田沢湖の畔に
杉の木立が高い
収穫期の田園よ
恋に破れる夢よ
涙を流すものは罪深きものなり

乳頭山が湖面に漂う
無数のボートと

一箇の遊覧船
水底に沈んだ恋人よ哀れなり
雲の切れ切れに
センチメンタルが流れてゆく
カラスも冷えてゆく

青函連絡船は外洋にある
カムチャツカ半島よ、シベリアよ
いま航路は凍っているか
垂直なる託宣板をモーセの金かくしという

21

乱に曰く
種架も取り払われ
農夫も土地に埋れる
田の土は
凍った白夜

22

たちもとおる
君に会えたのも
月のモノのなせるわざ
そも悔のいらたか

幸せと不幸の返礼を思うだに
凍える心

23

寂しい夕暮とセレナーデ
枕言葉に冷や死んす
美女の足下に
人も知らない秋の草本
ガラスのかかとが
荒れ野に埋っている

24

クレイオーよ
地球儀が欠けている
眼は半月だ
クルティウスの分類は
デルフォイを四つに分つ
人生の短促
乱心御用おまる割り
急行列車が塩の水に漬っている

25

宗教とはジャイロ効果

午後　稲妻が疾った
みぞれが夜半までつづいた
あたたまるために呑んだ
一杯のウィスキイが
寒さをこごえさせた

茜色の山の端を
行者がひとり登っている
ビアガーデンは閉鎖されたが
ラグビーボールを抱いている
ああ　あの豚の筋肉！

26

狂気のはじめとおわりが永遠だ
いまは塩汗　肌合わせ
はじめとおわりが違っていても
世界は一貫している
何を遺そうと反故
何を遺そうとも沙
神はまだいたぞ
一家に伝わるまがいものの器

27

ウィスキイが死んだ

グラスのかわりに
骸骨をつかんだ
黒衣の女が
エンゲージリングを破棄する

28

もろい骨が
ガラス細工のように
鋭く突き出たかかと
貞操帯と卵
冷たいアスファルトに接吻し
その割れ目から生まれる舌

ツリガネソウが揺れる
鏡には妻の顔
つがいの蛇を
少年の匂いが追いかける

夜まで待てぬ
地平線に女を残して
ペルセウスは出奔した

今より数うること八年前に発行した「地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中枢に大洪水を齎すであろうか（略称フネ）」全三号をご記憶の方はおありだろうか。そのときは、「幻の詩篇誌はついに不可能なり」と断じて廃刊にしたわけだが、それでも書き継がれる詩篇が反故の海の底に打ち棄てられるのは忍しくもあり、またなんとも寂しいものである。それはそれでよいのではあるが、遣瀬ない思いは募るばかり。それで、深刻な構えはよしにして、読者諸賢につつましい仕事のご報告なりをいたしたいと思いたち、かような雑誌を企図した次第。幸い、題字をお願いした加藤郁乎氏に、「緑字とはめでたし魔道はいけません」との祝辞も賜わり、心して恬淡たるを銘ずべし。

さりながら、以上のような前触れは賛言と申すべきもので、実のところはのんびり気長に本誌を続けていく所存、読者にはただただご愛顧を願い奉るのみ。

ところで本誌は年に三、四回刊行するつもりなれど、あまりはっきりしたことを申せぬ事情もこれあるにつき、明言のほどはご勘弁を。それでもなお予約ご希望の方は当方にお申込み戴きたし。

また寄稿に関しては、詩篇はいわずもがな、さまざまのジャンルのもの（絵、写真等）も大いに歓迎いたしたく、さすれども編集の独裁制を旨とすることお含みおきを。

（ついでながら、誌中、岩井薫生は薔薇王の改めにて、ご紹介まで）

直江屋主人敬白

緑字生ズ　創刊号＊昭和五十八年七月十一日発行＊定価　千五百円＊編集発行人　紙田彰＊発行所　東京都江戸川区西葛西五―八―七―九〇六　直江屋＊振替　東京一―四〇一五七＊電話　〇三（六八六）五九一五＊印刷所　共信印刷

緑字生ず